＜コウちゃんのクラス　特別支援教育を考える＞　（上）笑顔の力

中日新聞　暮らし　2015 年 5 月 27 日

http://www.chunichi.co.jp/article/living/life/CK2015052702000004.html

＞　愛知県刈谷市の富士松東小学校。六年七組の教室で車座になった子どもたちの前で、「コウちゃん」こと松本康汰君（１１）は、車いすにもたれ、首を垂れていた。

脳性まひで、全身が不自由。生活全般に介助が必要で、知的障害も重く、コミュニケーションも難しい。

「では、魔法の音楽をかけますよ」と、担任の深谷ひろみ教諭（５７）がＣＤをセットした。

♪あるこう　あるこう　わたしは元気…。

交流学習で、みんなの歌に大喜びのコウちゃん（中）＝愛知県刈谷市の富士松東小学校で

アニメ映画の挿入歌の「さんぽ」のメロディーが流れだすと、コウちゃんは、むくむくと顔を上げ、口元から笑みが広がっていく。

「すごい」と、子どもたちからどよめきが起きた。

「前は、動けなくてかわいそうだと思っていたけど、楽しい子だと分かって、体が不自由なのにすごいなって思うようになりました」。今月あった交流学習で、同じ学年の古小高詩音（こおだかしおん）さん（１１）は目を輝かせた。

コウちゃんのクラスは、肢体不自由の特別支援学級の七組。在籍児童はコウちゃん一人で、二〇一〇年の入学に合わせて新設された。以来、深谷教諭が中心となり、コウちゃんの力を伸ばす指導に取り組んできた。通常学級との交流学習、他の特別支援学級との合同学習も、その一環だ。

昨年度は、一年下の四年二組との交流学習を計六回実施した。障害と障害者の日常生活を知り、「どうしたら一緒に遊べるか」を考える授業だ。

名前を呼んでも返事がない。途中で寝てしまう。幼児用の楽器を持たせても音が出ない。でも、体に触れながら「コウちゃん、歌を聴きたい？」などとゆっくり話し掛けるうちに、視線が合ったり、大きな声で笑ったりするようになった。

子どもたちは、コウちゃんが無理なく参加できるようにと、低い台を手でたたいて紙コップを落とす「トントン相撲」というゲームを考えた。声援が高まるとコウちゃんもはしゃぎ出す。そんな笑顔がみたくて、休み時間に遊びに来る子も増えた。

「コウちゃんの表情が豊かになったし、子どもたちの心にやさしさ、自主性が育まれていく。共に成長する効果を実感しました」と深谷教諭。

五回目の交流学習では、コウちゃんが「アー、アー、アー」と声の高さを変えながら、長く叫んだ。「あいさつしてるんだ」と子どもたちは大喜びした。

◇

重い身体障害と知的障害がありながら、特別支援学校ではなく普通の学校の特別支援学級に通う子が少しずつ増えている。障害者権利条約（二〇〇六年の国連総会で採択）で「学習への平等な参加」が掲げられたことが追い風になっている。「ひとり学級」のコウちゃんと、支える人たちの姿を通して、障害児教育の在り方を考える。

＜特別支援学級＞　障害のある児童生徒に対し、きめ細かな教育を行うために小中学校に設置された少人数の学級。知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、弱視、難聴、言語障害、自閉症・情緒障害の７種類がある。１クラス８人を上限に、各市町村の教育委員会が設置できる。担任教師のほか、特別支援教育支援員を配置する学校も多い。

…などと伝えています。

☆＜コウちゃんのクラス　特別支援教育を考える＞　（中）連携

中日新聞　暮らし　2015 年 5 月 28 日

http://www.chunichi.co.jp/article/living/life/CK2015052802000001.html

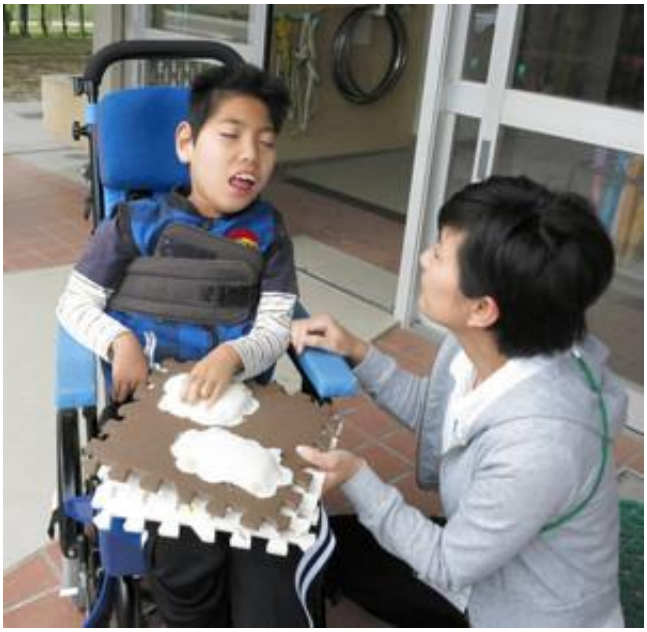
＞　曇り空の朝。特別支援教育支援員の鎮目圭美（しずめたまみ）さん（３０）が、車いすを押して富士松東小学校（愛知県刈谷市）の校庭に出てきた。

「コウちゃん、今日の天気はどうかな」

鎮目さんは、反応のない松本康汰君（１１）の手のひらを、太陽（晴れ）、雲（り）、傘（雨）をかたどった三種類のクッションに押し当てた。「そう、曇りだねー、正解でーす」と大きな声でほめた。

触感を通してコミュニケーションの力を伸ばそうとする息の長い指導。支援員は、日常生活の介助や学習活動のサポートをする職員で、担任の深谷ひろみ教諭（５７）との二人三脚で取り組んでいる。

日めくりカレンダーをはがすのもコウちゃんの役目だ。腕を引っ込める癖を利用して、手でカレンダーの端を握らせてはがす。コウちゃんは指示を理解してはいないが、「よくできたねー」とほめられる体験を重ねるうち、「アー」と返事をしたり、声をかけた人に目を向けるなど、周囲への関心が高まってきた。



「コウちゃん、今日の天気は？」。クッションの触感から、コミュニケーションの力を伸ばすことを目指す。右は鎮目さん＝愛知県刈谷市の富士松東小学校

コウちゃんとの学校生活は六年目となったが、「最初は途方にくれました」と深谷教諭は振り返る。重い脳性まひの子を指導するのは初めて。助けになったのは、肢体不自由の子の療育、教育のノウハウを持つひいらぎ特別支援学校（同県半田市）との連携だった。

深谷教諭は三年間、毎月一回ずつコウちゃんと一緒に同校に通い、勉強してきた。同校の教師に，コウちゃんのクラスに来てもらい、かかわり方などのアドバイスをしてもらった。

脳性まひの子の運動機能を伸ばすには、正しい姿勢が重要だ。一年生のころから、首が傾かないよう

にするために、クッションや枕を使って練習。余計な力が入って体がそらないように、マットの上にうつぶせになって力を抜くリラクセーションに取り組んだ。

硬直していた手も、マッサージを続けるうちに、ボタンを押す動作が可能になった。三年生の時には、おもちゃに手を伸ばして触る行動が出た。食事では、固形物をかまずにのみ込む癖があったが、細かく切ったパンを奥歯の上に置くなどして、かむことを覚えた。

成長を土台に、他学級との交流も広がった。

今年二月の社会見学では、同級生たちと一緒に中日新聞社（名古屋市中区）を訪れ、新聞製作の現場を見て回った。この秋には京都・奈良への一泊の修学旅行がある。

深谷教諭は、特別支援校のサポートを受けることで、孤立感を持つことなく指導に取り組めたという。

「この子は分かっている、できると信じることで、コウちゃんの反応を待ち、気持ちを受け止められるようになりました」

＜特別支援学校と小中学校との連携＞　２００７年施行の改正学校教育法で、従来の養護学校、盲学校、聾（ろう）学校が特別支援学校に名称変更されたことに伴い、地域の幼稚園、小中学校などにおけるセンター的な役割を持つことが定められた。

具体的には▽要請に応じて障害のある子どもの個別指導計画や、教育支援計画の策定に協力▽教師への支援、研修協力▽福祉・医療など関係機関との連絡調整－など。

…などと伝えています。

☆＜コウちゃんのクラス　特別支援教育を考える＞　（下）熱意

中日新聞　暮らし　2015 年 5 月 29 日

http://www.chunichi.co.jp/article/living/life/CK2015052902000004.html

＞　コウちゃんこと、松本康汰君（１１）＝愛知県刈谷市＝は二〇〇四年一月、双子の兄弟の弟として生まれた。兄の健汰君に障害はなかったが、コウちゃんは脳性まひだった。

「康汰は風邪をひいても頭が痛いとか言うことができないし、症状の出方が普通の子とは違うんです」と祖母一代さん（６５）。急に動きがバタッと止まって息遣いがおかしくなる。熱性けいれんじゃないかと病院に連れていったら、即座に入院ということが何度もあった。

就学に際して困ったのは、特別支援学校が市内にないこと。隣の同県半田市にある「ひいらぎ特別支援学校」までは車で片道一時間半かかる。コウちゃんが五歳になったころから、父の建一さん（４０）は地元の小学校での受け入れを求めて、刈谷市教育委員会に相談。市は予算が必要なことや、専門性のある教員がいないことなどを理由に、受け入れには消極的だった。

だが、〇七年の学校教育法改正に伴う特別支援教育推進の流れと、建一さんの熱意が行政を動かした。市教委はコウちゃんの入学前、富士松東小学校の駐車場から車いすで移動できるバリアフリー構造に改築。入学後にクーラーを教室に取り付けた。

当時、愛知県では肢体不自由学級は「児童二人以上」が開設要件で、「ひとり学級」は特例扱い。コウちゃんが入学した年は十五校だけだった。人数の要件がなくなった本年度は六十二校に増えた。担当教員の研修にも県教委が力を入れるようになった。

さらに、肢体不自由児を対象にした市立特別支援学校が一八年度に開校することになり、中学の特別支援学級を経て高等部進学のめどが立った。児童が障害のあるコウちゃん

と交流し、教育関係者もその意義を実感できたことで、地域の特別支援教育・福祉の充実につながってきた。

「多くの方々の理解と協力に感謝しています」と建一さん。二十七日にあった交流学習に参加した健汰君は「コウちゃんはちゃんと首を上げて歌を聞いていて、頑張ってるんだと思った。みんながコウちゃんを見ているのはちょっと照れくさいけど」と温かい目で見守る。

心身障害児の福祉・教育問題に詳しい同県豊田市こども発達センターの三浦清邦センター長は「特別支援学級と特別支援学校の連携によって、児童のコミュニケーションの可能性を広げることができ、周りの子どもの障害者理解も進んだ。こうした取り組みが広がってほしい」と評価する。

ただ、同じ肢体不自由児でも、たんの吸引や人工呼吸など医療的ケアを必要とする子の受け入れ態勢は十分ではないという。看護師の配置がなければ地域の小中学校の特別支援学級で学ぶのは難しく、地域によっては特別支援学校に配置される看護師も不足しており、家族に付き添いを求めるケースもある。

「すべての子どもたちが、個々に応じた教育を受けられ、日ごろ頑張っている家族の負担も軽減する仕組みをつくっていく必要がある」と課題を指摘する。

…などと伝えています。

コウちゃんの成長を見守ってきた父の建一さん。左は祖母の一代さん＝愛知県刈谷市の自宅で